立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターのご紹介

センター長　中村 秀之

2002年に旧江戸川乱歩邸と旧蔵書・諸資料を一括して引き受けて以来、立教大学では、豊島区指定有形文化財となった土蔵の復原、近世・近現代の蔵書整理、自筆原稿・書簡といった寄託資料の整理、さらにはそれらの作業の成果の一端を世に問うた「江戸川乱歩と大衆の20世紀展」（2004.8.19～24）の開催と、貴重な文化遺産の保存と公開、という両立困難な課題に真摯に取り組んできました。

この蔵書の整理完了に伴い、大衆文化研究の拠点となることを期して、当研究センターは設立されました。もともと立教大学には文学部、社会学部を中心として全学的規模での大衆文化研究への志向が存在しており、それがこの貴重な文化遺産に対して大学としてどうその社会的責任を果たすべきなのかを検討するなかで、乱歩研究を核とする大衆文化研究センターという形に結晶しました。

2004年の「江戸川乱歩と大衆の20世紀展」においては、乱歩作品の中でも大衆の20世紀と正面から取り組んだ通俗長編ものを再評価するなど、大衆文化という角度からのアプローチを行ってきました。さいわいこれは斬新な視角として高い評価を得、我々としても、新しい乱歩研究はこの方向を押し進める以外にはないとの確信を持つに至りました。

こうした方向性を、全学的規模での大衆文化研究の、さらに大きなうねりへと結びつけるべく、対象も乱歩や近現代のみにとどまらず、時代とジャンルとを超えた幅広い大衆文化研究に結実させていくことが要請されています。そうした研究の拠点に加え、資料の公開・閲覧、翻刻を通して、立教大学の社会連携の一端を担う拠点として、この立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターは機能することをめざしています。そのためにも学内学外を問わず多くのご支援とご協力とをいただけるよう、お願いする次第です。

2016年2月

江戸川乱歩（1894―1965）

本名、平井太郎。明治27年10月21日三重県に生まれ、名古屋で育つ。
早稲田大学で経済を学びながらポーやドイルを読む。様々な職業を経験した後、大正12年に雑誌「新青年」に「二銭銅貨」でデビュー。
昭和2年までに「D坂の殺人事件」「人間椅子」「パノラマ島奇譚」などを執筆する。休筆を挟んで「陰獣」「芋虫」「孤島の鬼」「押絵と旅する男」等を発表。
昭和4年の「蜘蛛男」より娯楽雑誌に長篇を連載、「魔術師」「黄金仮面」「黒蜥蜴」など。
昭和11年から「怪人二十面相」を少年倶楽部に連載、少年探偵のシリーズは晩年まで続く。
同時期から評論も多く手がけ、「鬼の言葉」（昭和11年）「幻影城」（昭和26年）などにまとめられる。
昭和22年、探偵作家クラブ結成、初代会長に就任。昭和29年、乱歩賞を制定。
昭和32年から雑誌「宝石」の編集に携わる。
昭和38年、日本推理作家協会が認可され理事長に就任。
昭和40年、7月28日脳出血のため自宅で死去。享年70。

池袋キャンパス

●JR山手線・埼京線・高崎線・東北本線、東武東上線、西武池袋線、地下鉄丸ノ内線・有楽町線『池袋駅』下車。西口より徒歩約7分。

立教大学江戸川乱歩記念
大衆文化研究センター

公　開　水曜・金曜
（10時30分～16時）
資料閲覧には事前予約が必要です

住　所　〒171-8501　東京都豊島区西池袋3-34-1

電話番号（FAX兼）03－3985－4641
E-mail:rampo@rikkyo.ac.jp

（2016. 03）

立教大学江戸川乱歩記念
大衆文化研究センター

Edogawa Rampo
Memorial Center for Popular Culture Studies,
Rikkyo University

（乱歩と立教大学 ）

「東京市二於ケル住居転々ノ図」（「貼雑年譜」）によれば、転居を繰り返した東京での乱歩の住まいは26ヶ所に及ぶ。そしてその26番目の住まいが、昭和７年に郡から区に昇格したばかりの豊島区池袋3丁目1626番地の家賃90円の土蔵付きの借家だったのである。

昭和９年７月に乱歩はここに居を定めた。すぐ近くには立教大学や系列の聖公会神学院があり、これが乱歩と立教大学との不思議な縁の始まりとなった。以後乱歩は、途中転居を考えたこともあったが、結局は昭和40年の没年までこの地で後半生を過ごした。そしてさらにそれから40年近くの歳月が流れ、2002年に旧乱歩邸と蔵書・資料が立教大学に帰属することとなったのである。

乱歩がなぜ池袋を選び、なぜ二度と転居しなかったかはいろいろ考えられるが、その前に居た芝区車町の喧騒な環境と比較して、転居当時の乱歩邸は「梅林」「ツツジ」「畑」「芝」「築山」などに囲まれ、今とはおよそかけ離れたのどかさであったと想像される。そんな自然の豊かさが、中心部のごみごみとした雰囲気に愛想をつかした乱歩を惹きつけたのかもしれない。

さらに戦時下には近隣の人々との信頼関係も生まれ、戦後は戦後で、今度は復興した池袋の繁華街が乱歩にとってホームグラウンドのような場所となる。またそのいっぽうで、立教大学とは家族を通してプライベートな絆が結ばれてもいった。今回乱歩邸が立教大学や地域のシンボルとして生まれ変わることになったのも、こうしたさまざまな経緯を振り返れば必然の結果であったように思えてくる。

（乱歩文学）

これまで乱歩ミステリーといえば、「Ｄ坂の殺人事件」などの初期の本格ミステリーと晩年の少年探偵団ものが取り上げられることが多かったが、大衆文化という観点から見ると、その二つにはさまれ、従来は軽く扱われてきた「蜘蛛男」や「吸血鬼」などのいわゆる通俗長編もののほうこそが注目に値する。昭和モダン期の大衆の圧倒的な支持を集めたこれらの作品にはそれ以前のさまざまな成果やノウハウが生かされ、また、これらを通過したからこそ後の少年探偵団ものが誕生した、との見方も可能であり、その意味では通俗長編を乱歩ミステリーのかなめと位置づけることもできるのである。

関東大震災後、東京は大きく生まれ変わる。抜本的な道路整備が行われ、そこを急増した円タクが我が物顔に走り回ることになる。住宅地の郊外への発展も盛んで、各私鉄沿線を中心としてハイカラな新興住宅地が開発され、白い壁に赤い屋根の、いわゆる文化住宅が庶民の憧れの的となった。富裕層では暮らしも洋風化し、ソファーやスチーム暖房、デスクや卓上電話を備えた洋風の応接間のモダンさは目を見張らせるものがあった。モボモガと称される洋装の男女が街を闊歩したのもこの時代で、裾の広がったズボンや丈の極端に長いスカートが流行した。そんな時代にふさわしく、モダンにイメージチェンジした明智が、お洒落な事務所に陣取り、大東京を舞台に悪漢たちと本邦初のカーチェイスを繰り広げたりするのが、この時期の通俗長編の売り物だった。そこには自動車や電話はもちろんのこと、飛行船、気球、エレベーター、飛行機、モーターボートと、20世紀科学文明の粋が次から次と登場して、大衆読者の「あこがれ」をかきたてた。

それ以前の乱歩作品が「通」向けの、どちらかといえば閉ざされたものであったのに対して、大衆読者を意識して時代や社会を存分に取り込んだ通俗長編は乱歩ミステリーの可能性を最大限に拡張し、それがのちの少年ものへと引き継がれていった。通俗長編を経たからこそ、少年ものはミステリー性と通俗性とを兼備した人気作品となりえたのである。

（土蔵と蔵書）

2003年3月に乱歩邸の土蔵は豊島区指定有形文化財に指定された。乱歩邸は最初大阪市東区の坂輔男家の別宅として建てられ、その後借家となり、昭和9年からは乱歩が住み、昭和27年に乱歩の所有となった。さらにそれが立教大学の所有となったのは2002年3月であり、その後立教大学では豊島区より補助を受け2003年度より土蔵の復原工事に着手し、2004年春に完成させた。2004年8月の「江戸川乱歩と大衆の20世紀展」以来、機会を設けて土蔵は公開しているが、内部や蔵書類の状態を良好に保つために、入り口付近までの公開としている。

蔵書の保存というだけなら他にいくらでも例があるが（たとえば東北大学の漱石文庫など）、書庫ごと保存されるのはきわめて稀である。しかもその書庫が一種独特な雰囲気を持った土蔵であり、かつ、その主が蔵書をめったに処分しないタイプの蔵書家であるなど（この反対が、執筆が終わるとかなりの量を処分したとされる松本清張などの場合だ）、乱歩蔵書のありようはきわめて特異なケースといえる。ひとくちに「蔵書」あるいは「蔵書の保存」といっても、その内実は千差万別なのである。

ところで乱歩蔵書は主に ①土蔵内部 ②土蔵の外側の軒下部分を書庫に改造したもの ③母屋・洋館部分、の三つに分けて保存されてきたが、土蔵の復原工事にともない軒下部分の書庫は撤去され、現在は主に土蔵内部、母屋内の書庫、立教大学図書館の保存書庫に分散保管されている。それらの所蔵内容は立教大学図書館のホームページ上で確認でき、週一回は閲覧もできるが、その冊数は和書（翻訳書を含む）約13000冊、洋書2600冊、雑誌5500冊ほどである。また一般には未公開だが、950点、3500冊ほどの和本も別にある。作家蔵書といえば収書傾向や書き込み調査が定番だが、乱歩の場合、書庫ごと保存されるがゆえにわかる配置（没後の変更や追加を慎重に見きわめた上で）や使用頻度、利用上の特徴など、一種の書庫考古学／蔵書解体学が今後必要になってくるだろう。